

# 地球を 読む

「ロシア人は、人類全体の一部を構成するといふよりも、世界に大きな教訓を与えるためにだけ存在する民族なのです」(外川継男訳『哲学書簡』)

19世紀初頭のロシアの思想家、ピョートル・チャアダーエフは、ロシアがアジアと欧州の大きな分かれ目であり、時の一方を中国、他方をドイツの上に置いていると述べた。ロシア人は



山内 昌之

武蔵野大学特任教授

## ロシア 歴史の教訓

### 「ユーラシア国家」の挫折

知性と想像力を自らの中に融合し、世界の歴史をロシア文明と結合させる使命を帯びるはずだった。

しかし、ウラジミール・プーチン大統領も尊敬するピョートル大帝やエカテリナ2世は、文明の本質たる人間の自由と多様性の尊重をロシアに定着させなかつた。プーチン氏も、ロシアはアジアでも欧州でもなく、その違いを超越したユーラシアとして世界に教訓を与える独特な存在だと自負するかのようだ。

ユーラシア主義の立場を主張しながら、かつてのロマノフ朝ロシア帝国やソ連の解体で消え去った統一国家の大ロシア再生のために粗暴な侵略も辞さない。

その再生には、13世紀のルーシ(前近代ロシア)の独特なユーラシア国家としての

「軍事行動」の正当性・違法性を世界に弁明する責任もなく、必要なら国連安全保障理事会の常任理事国として拒否権を行使すればよいと考える。欧州やアジアの区分を超越した勢力圏化と、スターリン体制の粛清と非人間性の隠蔽にも利用した。

チャアダーエフは、ロシアが欧州より遅れて歴史に登場した分、欧州の犯した過ちを繰り返さない利点に恵まれるはずだと善意から信じた。ところがプーチン氏は、ロシアが多民族社会の性格を帯びているという

中心だったキエフ(キエフ)つまりウクライナ(小ロシア)も含まれる。ベラルーシ(白ロシア)と共にウクライナも偉大なスラブ連邦(大ロシア国家)に加える

20世紀以降、ロシアは、世界史を転換させる四つの大事件を経験してきた。第一に、ロシアでは1904年から17年にかけて日露戦争敗北とロシア革命があっ

て、文明論的使命を軍事的に達成しようとしたのだ。第三に、89年の冷戦終結から91年のソ連解体は、大ロシア国家を分裂させたが、市民的自由と民族共和国独立への道を開いた歴史の意味は大きい。これら三つは、チャアダーエフに倣えば、ロシアが正負の「教訓」を世界史に示した例といえるかもしれない。

〈2面に続く〉

# 地球を 読む

1面の続き

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。ハーバード大客員研究員、東大中東地域研究センター長を歴任。東大名誉教授。神田外語大客員教授。

第四の重大事件である今回のウクライナ侵攻に、歴史の正の教訓を見いだすのは難しい。ウクライナの「非ナチ化」を求めるのは、独ソ戦という大祖国戦争のアナロジーだろう。だが、いま祖国防衛戦争を進めているのはウクライナの方だ。しかも、フィンランドの力を侮って1939年に冬戦争を仕掛けたスターリンの苦戦同様に、プーチン氏の侵略はウクライナの頑強な抵抗に遭っている。

ウクライナに侵攻したロシア軍を見ると、「命は鴻毛より軽し」という言葉を思い出す。それは、国民あつてのプーチン氏ではな

く、プーチン氏あつての国民という独自の国家観のせいである。国民は母なるロシア(プーチン氏)を守る必要はあつても、母なるロシアの方は必ずしも国民を

保安委員会(KGB)出身のプーチン氏の権力を支えてきた連邦保安局(FSB)、内務省、国防省にいたる「国家の人間」たちに他ならない(フィオナ・ヒル『プーチンの世界』)。

これらの武力省庁に属する者(シロビキ)は、自分たちこそ最高の愛国者にして国家の最終守護者だと自

任する。しかし、彼らはプーチン氏を含めてロシア国家を内部から腐食させるシロアリのようだ。前線の兵士に食料も装備品も行き渡らず、投降や脱走する者も

多量に出ている。これは、23兆円もの個人財産を秘匿していることさやかれる大統領のせいでもある。軍から秘密警察まで、兆や億の単位で国家財産や各

## 独裁者の核恫喝 許すな

種利権を横領する個人と比べたら、かつて黒海からクリミアまで勢力を伸ばした東ローマ帝国(ビザンツ)の皇帝の蓄財などかわいなものだ。6世紀の帝国会計検査官たちは、戦死するか除隊した兵士の籍を抜かず

にその給与を着服した。彼らは、不正を働き皇帝ユスティニアノスへ貢納す

ることが正義と信じていた。しかし、このため兵士の実員は常に不足し、戦死した兵士のポストが空かず昇進できない。軍隊が機能しなかったのは当然である(プロコピオス『秘史』)。

この種の不正がもっと大規模にはびこる現代のロシア軍では、ワレリー・ゲラシモフ参謀総長があわやの危険にひんし、10人以上の

將軍が実際に戦死したように前線で督戦しなければ、兵士たちは戦場の現場に出ようともしない。前線の兵力を補うためシリアやチェチェンのムスリム兵を国内外から投入したとすれば、プーチン氏はロシア国家をまとめてきた正義と国民性から離れた「大義なき戦争」への道をますます歩むことになる。

自分の権力と利益を追求する「たった一人の人間」による不正な支配は、国民のためではない。プーチン氏は古代ならさしずめ僭主、現代なら独裁者と呼ばれる政治家である。スコラ哲学者のトマス・アクイナスによれば、僭主は正義のためでなく気まぐれに人を殺す。しかも、悪人よりも善人に猜疑心を抱き、見慣れぬ徳を恐れる(『君主の統治について』)。

これまで、誰も制止できなかつた独裁者が核の使用を示唆した場合、核恫喝に対抗するエスカレーションに発展した例はない。プーチン氏による究極の武力行使を阻止するには、①ロシア国民の大多数がこの人物の本質を見抜いて権力の座から追放する②核の暗号キーを使う複数の有資格者がプーチン氏の「気まぐれ」な核の使用を許さぬ勇気を発揮する③欧米と日本が、ロシアの越えてはならぬレッドラインを明示する――が必要になる。

第3次世界大戦の危険と阻止の可能性を多面的に議論する機会は少ない。しかし、プーチン氏だけに核恫喝の自由を許しておくわけにはいかない。チャアダーエフの「教訓」は2世紀以上を経て、いまや預言的によみがえるのである。

英文は金曜日(10月14日)のジャパン・ニューズに掲載予定です